

二十世紀初期の日中知識人の中国観を読み直すために —夏丕尊が訳した「芥川龍之介氏の中国観」を読む

劉芳

(大連外国語大学)

Abstract

Xia Mianzun compiled Akutagawa Ryunosuke's "The journey to China" with the title of "Akutagawa Ryunosuke's China outlook" in "The short story magazine" published in April 1926. In this paper we examine Xia Mianzun's translation with the aim of studying Akutagawa Ryunosuke's view of China. We refer specifically to related historical materials of the same period in order to analyze from multiple perspectives the contents of Akutagawa's travel journal and his implied opinions. Furthermore, we interpret the journal as important data to gain a deeper understanding of the author and the translator, and of the society of the time.

はじめに

明治維新の後、日本人が中国大陸を旅行し、その実情を見ることができるようになると、日本人による中国の旅行記が多く書かれた。たとえば、岡千仞『観光紀游』（旅行は明治十七年、初出は大倉孫兵衛、明治二十五年）、内藤湖南『燕山楚水』（旅行は明治三十二年、初出は博文館、明治三十三年）、夏目漱石『満韓ところどころ』（旅行は明治四十二年、初出は『東京朝日新聞』（明四十二・十・二十一～十二・三〇）、『大阪朝日新聞』（四十二・十・二十二～十二・二十九）などを挙げるができる。

しかし、当時の中国にショックを受けた人は少なくない。中国旅行記は、当時の日本人の現実の中国に対する複雑な失望の心境を反映している。竹内実が言うように、「社会も、政治制度も、弊害累積なのであって、漢詩漢文をつうじて憧憬と親近感はもつが、日本の近代化を誇りとする立場からは、中国を時代おくれと断定してはばからない。こうした中国像の構造は、こんにちまで一貫してつづくのである」¹。しかし、これらの中国旅行記は中国で紹介されなかったために、中国人には知られなかった。

中国の新聞・雑誌において、日本人の中国旅行記が初めて話題になったのは、一九二六年（大正十五年）だった。夏丕尊は、『小説月報』（一九二六年四月発行、総十七巻第四号）に「芥川龍之介氏の中国観」（芥川龍之介氏の中国観）という題で、芥川龍之介『支

Liu FANG, "Stones from other hills may serve to polish the jade of this one --A reading of Xia Mianzun's translation 'Akutagawa Ryunosuke's China outlook'," *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No. 18, 2017. pages 73-87. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

那游記』の一部を翻訳・掲載した。芥川龍之介は、中国を旅行し帰国後「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」、「北京日記抄」を次々と書いて発表した。これらの游記をまとめた『支那游記』は、一九二五年（大正十四年）十一月三日に改造社から刊行された。内容は『上海游記』（『大阪毎日新聞』大正一〇・八・十七～九・十二、また『東京日日新聞』同年八・二〇～九・十四）、『江南游記』（『大阪毎日新聞』大正十一・一・一～二・十三まで二十八回にわたって連載）、『長江游記』（『女性』大正十三・九）、『北京日記抄』（『改造』大正十四・六）および『雑信一束』（『支那游記』に初版）の五部からなる。

芥川の「中国観」が発表されると、中国の知識人を中心に討論が起こり、注目を集めるようになった。その後、芥川の『支那游記』は今日まで中国で論じられ続けている。単援朝（2001）の「中国における芥川龍之介—同時代の視点から—」は、同時代の中国で芥川文学がいかんを受け止められていたかについて幅広く検証し、中国における芥川文学の評価および受容の問題を論じている。また、関口安義は『派遣員芥川龍之介—中国でなにを視たのか—』（毎日新聞社、1997）と「『支那游記』論—新たな評価軸をめぐって」（『文学研究』、2007）²で、大正十年、芥川が大阪毎日新聞社の特派員として、中国を遍歴した際の著作と書簡集などから丹念に検証していた。そして、その文学的成果とジャーナリスト精神のありかを、関口は独自の視点から読み解いている。単援朝と関口安義の研究は当時から現在までの豊富な資料を提示し、また芥川の「中国観」と中国における受容の実態を客観的に見ている。

本稿は、従来の芥川文学と受容の文脈ではあまり注目されてこなかった当時の中国状況と、日本人の中国に対する認識のさまざまな手がかりから、夏丐尊が翻訳した「芥川龍之介氏の中国観」（芥川龍之介氏の中国観）のテキストを深く掘り下げ、『支那游記』における芥川龍之介の中国に対する「読み方」についていくつかの可能性を提示していく。さらに、用いられている表現を分析し、訳者があえて訳さない部分、すなわち「省略」している部分に着目し、その「省略」の背景をさぐることも試みたい。

1. 夏丐尊が翻訳した「芥川龍之介氏の中国観」

前述のように、夏丐尊は芥川龍之介の『支那游記』を抄訳し、「芥川龍之介氏の中国観」というタイトルで1926年4月に『小説月報』で発表した。「訳者記」において、夏丐尊は『支那游記』に出会った契機と翻訳動機について、以下のように説明している。

上海へ行くとき、必ず寄っている日本の本屋に何か買う価値のある本があるかどうかを見に行く。今度も、何冊かの本を買い、店を出ようとしたところ、本屋の主人は突然この本を指さして、「先生、この本にご興味を持たないかもしれないが、近頃日本ではよく売れている。中に貴国への皮肉が結構多い」と声をかけてくれた。そこで、その本を買い添え、上海から寧波への船の中で一通り目を通した。

確かに本の中に皮肉が随所に見える。しかし、公平な気持ちで論ずれば、そもそも国内の現状はそ

の通りで、作者が故意な誇張を妄りに加えたわけではない。たとえ作者が私の眼前にいても、自国を弁護することはできず、ただ、国民の一人一人に皆この本を読んで、彼の観察を鏡として自分の容貌がどんなものなのかを見て欲しくてたまらない。こう考えると、本の中の特に紹介してみたい一部分を訳出し、本屋の主人の言葉を借りて、「貴方はこの本に興味を感じないかもしれないが、日本では最近よく売れている。その中に貴国への皮肉が結構多い」と、謹んで国民に告げたいと思う。

3

夏丐尊は国民の反省を強くうながすため、この引用に示されているように、「芥川龍之介氏の中国観」には、原文の『支那遊記』の中国への皮肉を国民に知ってほしいという考えが込められている。「ただ、国民の一人一人に皆この本を読んで、彼の観察を鏡として自分の容貌がどんなものなのかを見て欲しくてたまらない。（略）謹んで国民に告げたいと思う」、という考えによって原文を翻訳したわけである。

訳文は原文における 61 章の中の 14 章を抄訳して取り上げている。いくつかの章には途中省略しているところがある。この 14 章はそれぞれ「第一瞥」（第一瞥）、「上海城内」（城内）、「戲臺」（戲台）、「章炳麟氏」（章炳麟氏）、「鄭孝胥氏」（鄭孝胥氏）「南國的美人」（南国の美人）、「滬杭車中」（車中）、「西湖」（西湖）、「蘇州」（蘇州）、「南京」（南京）、「蕪湖」（蕪湖）、「北京雍和宮」（雍和宮）、「辜鴻銘先生」（辜鴻銘先生）、「十刹海」（十刹海）である。

以下、ここで取り上げられた芥川の中国における体験と感想を表で簡潔に追ってみよう。

タイトル	抄訳された原文の段落	抄訳された内容	備考
1. 「第一瞥」	原文「第一瞥（上）」の最初の一段落しか訳していない。	芥川が埠頭で客を待つ車屋の不潔と大声などに驚いた内容である。	原文には「第一瞥（中）」と「第一瞥（下）」があるが、取り入れられていない。
2. 「上海城内」	夏丐尊が原文「城内（上）」、「城内（中）」、「城内（下）」を抄訳している。	それは芥川が上海城内の見物を記述したものである。池へ悠々と小便をしていた一人の中国人、盲目の老乞食で思い起こされた鉄拐仙人のこと、城隍の像を見て聊齋志異を思い出すこと、芥川は現実の中国に興味津津である一方、「現代の支那」にがっかりしていることも少なくないようである。	夏丐尊は「文章規範」や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢学趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い ⁴ でこの章を終りにしている。
3. 「戲臺」	夏丐尊は原文「戲台	芥川は中国戯劇を見学したうえ	楽屋の綺麗さについて

	(上)」、「戯台(下)」を抄訳してまとめている。	で、四つの特色を詳細に説明している。また、楽屋へ緑牡丹に会いに行くときの話を対照的に記述している。	て、「日本の帝劇の楽屋などは、驚くべく綺麗なのに相違ない」。芥川と話し合いながら、緑牡丹が「横を向くが早いか、真紅に銀糸の繡をした、美しい袖を飛して、見事に床の上へ手漥をかんだ」というところで、この章を終りにしている。
4. 「章炳麟氏」	原文の内容がほとんどすべて訳されている。	章炳麟の容貌、書斎と飾り物の大きな罫まで記述されている。また、章炳麟は「現代の支那」の政治に対する発言が芥川から記録されている。	
5. 「鄭孝胥氏」	夏丏尊は原文の内容をほとんどすべて訳している。	芥川が鄭邸の内外を観察し、伝聞による鄭氏の「清貧」に処していることが納得できない。また、互いに当時の中国の政治問題について意見を交わし、芥川は思いがけなく中国の政治を論じることになった。	
6. 「南國的美人」		夏丏尊は芥川が神州日報の社長余洵氏と食事するときに出会った美人のことを詳細に翻訳している。	
7. 「滬杭車中」	夏丏尊は「車中」と「車中(承前)」を抄訳している。	夏丏尊は「車中」と「車中(承前)」を抄訳している。	とくに二つのことが詳細に記述されている。一つは、芥川が村田鳥江君に吹きかけた「僻見」論である。二人は乗車するときに出会った車掌に対する僻見が、自分の定規によって振り回されやすいことである。も

			う一つは、芥川が中国で見かけた俗悪を極めた広告である。これはなかなか気に入らずに、ついでに「日本は実にこの点でも、隣邦の厚誼を盡したのらしい」と、日本をも批評している。
8. 「西湖」	夏丕尊が原文「西湖（一）」、「西湖（二）」、「西湖（三）」と「西湖（六）」を抄訳している。	芥川が西湖の見所を見学しながら随所で抱いた感想を記述している内容である。西湖の俗化や秦桧から井伊直弼、乃木希典と芥川作品「将軍」が当局から検閲されたまでの話、また放鶴亭での感想などである。	原文「西湖（四）」と「西湖（五）」は全く取り入れられていない。
9. 「蘇州」	夏丕尊が原文「蘇州城内（中）」、「蘇州城内（下）」、「客棧と酒棧」をほとんど翻訳している。	芥川は男二人が刀と槍との試合を見、「水滸伝」を思い出している。また、宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一文廟の荒廃を見、直に中国当時の荒廃を思い起こしている。芥川は今関天彭の詩「修言竟是人家國，我亦書生好感時」を引用し心境を語っている。また、居酒屋で豚の胃袋や心臓を酒の肴にするのを見、芥川が驚いたことが書かれている。	「蘇州城内（上）」は全く取り入れられていない。
10. 「南京」	夏丕尊は原文「南京（上）」の一部分しか訳していない。	訳されている内容は芥川と南京で最初に案内してくれた中国人との間での、南京の土地の価値についての対話である。夏丕尊がその中国人の答え「私もやはり考へない。—第一考へる事は出来ないので。家を焼かれるか殺されるか、明日の事はわからんでせう。其處が日本とは違ふ所です。まあ今の	原文「南京（中）」と「南京（下）」は全く取り入れられていない。

		支那人は、子供の生ひ先を楽しみにするより、酒か女かに嵌つてみますね」ということで、この章を終りにしている。南京についての内容はほとんど省略し、最初の対話だけを訳すには、強い意味合いがあるといえる。	
11. 「燕湖」	夏丕尊は、見学内容と「現代の支那」に対する芥川の不満と嫌悪の部分の訳している。		原文の西村にかかわる内容が省略されている。
12. 「北京雍和宮」	夏丕尊は原文をほとんど訳している。	芥川は喇嘛寺などに興味も何もなかったが、北京名物の一つとして紀行文の一章に書く必要があるので、その見学を詳細に記述している。	
13. 「辜鴻銘先生」	夏丕尊は原文を全部訳している。	辜鴻銘先生の容貌と人物像、辜先生の社会への不満、先生の娘、特に印象に残されるのは辜先生が繰り返し大書した「老、老、老、老、老・・・・・・」である。	
14. 「十刹海」	夏丕尊は原文の二三文を除きほとんどすべて訳している。	芥川が北京でいろいろなところを見学したが、最も面白かったのは十刹海の遊園である。当時の旗人の細君の満洲流のお時儀、男女が同席できないこと、環城鉄道によって城壁を一つに増築することについて、芥川は「支那人の形式主義も徹底したものと称すべし」と述べている。	

夏丕尊はこうした記述を通じて、芥川が「現代の支那」に対する不満や批評を表明している点について国民に反省を呼びかけている。しかし中国人にとっては、芥川の実体験に根ざした不満や批評にどの程度の妥当性があるのか、検討すべきところも少なくない。こうした不満や批評については、それらをそのまま「結果」として扱うのではなく、むしろ、なぜそのような不満や批評がなされたのかという背景のほうを考える必要がある。つまり、

夏丏尊が期待している国民の自己反省なのである。

夏丏尊が訳した「芥川龍之介氏の中国観」全体の内容を踏まえたうえで、次にこの14章をいくつかの特徴でまとめ、具体的にどのように分析できるのかを検討してみよう。

2. 「修言竟是人家國，我亦書生好感時」

当時の中国は激動のさなかにあった。芥川『支那游記』において、「陳樹藩が叛旗を飛ばさうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英続盟が持ち上らうが」と、いくつかの事件を挙げている。この箇所は、夏丏尊の翻訳文「上海城内」にも収められている。

1912年1月1日、アジアで最初の共和制国家中華民国が南京に成立し、臨時大総統に孫文が就任した。いわゆる辛亥革命である。その後、孫文にかわって袁世凱が臨時大総統となった。さらに、江西都督をつとめた李烈鈞や革命派の重鎮黄興が蜂起し、第二革命を發動したが結局鎮圧された。1914年1月になると、袁世凱は国会を廃止し、独裁を可能とする新しい約法を公布し、1916年に帝政を復活させた。これに対して地方軍閥は、各地で反袁運動を開始し、第三革命が起きた。特に、袁の死後、軍閥間の抗争と南北二つの政権の分立は政情不安と戦いの日々を生み出していた。また、世界大戦の講和会議に出席した中国代表団は、山東省の権益が敗戦国ドイツから直接中国に返されるべきことを主張したが受け入れられず、ベルサイユ条約ではドイツの権益を日本が継承することとなった。このことが伝わると、中国各地で抗議行動が起った。五・四運動である。芥川が言っている「白話詩」は、五・四運動の知的な一側面を表している。

特に政治的な不安定と絶えることのない軍閥戦争は中国の国民に大きな不安・恐怖を抱かせた。夏丏尊の訳文「第一瞥」では、芥川が上海に着いた後、埠頭で出会った数十人の車屋についての叙述の一部を訳している。ここで、芥川の原文を取り上げよう。

埠頭の外へ出た思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我々を包圍した。我々とは社の村田君、友住君、国際通信社のジョオンズ君並に私の四人である。抑車屋なる言葉が、日本人に與へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何處か江戸前な心もちを起させる位なものである。處が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸ばしては、大聲に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人などは、少からず不気味に感ずるらしい。現に私なぞも彼等の一人に、外套の袖を引つ張られた時には、思はず脊の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位である。

車屋はいきなり客を包圍したり、いろいろな首をさし伸ばしては、大聲に何か喚き立てたりしている。この情景を見た芥川は「どれも皆怪しげな人相をしてゐる」と言っている。芥川は初めて中国の車屋のこの情景を見たのであり、ひととき強い恐怖を抱いたとしても

不思議ではない。しかし、立場を変えてみると当時の人々の不安定で苦しい生活の一面を見ることもできる。

また、夏丕尊は「南京」の訳文においては、芥川と南京を案内してくれる一人の中国人との会話しか訳していない。その中国人は返答するとき、自分の不安・恐怖を吐露している。ここで、芥川と中国人との会話を取り上げる。

(芥川)⁵「誰か今の内に買って置けば好いのに。浦口が盛になりさへすれば、きつと地價も暴騰するぜ。」

(中国人)「駄目です。支那人は皆明日の事を考へない。地面なぞを買ふものはありやしません。」

(芥川)「ぢや君だけ考へるさ。」

(中国人)「私もやはり考へない。一第一考へる事は出来ないのです。家を焼かれるか殺されるか、明日の事はわからんでせう。其處が日本とは違ふ所です。まあ今の支那人は、子供の生ひ先を樂みにするより、酒か女かに嵌つてゐますね。」

「家を焼かれるか殺されるか、明日の事はわからんでせう」。当時の中国の国民は、このように自分たちの現状を見、明日への希望を失っていたと同時に、「まあ今の支那人は、子供の生ひ先を樂みにするより、酒か女かに嵌つてゐますね」という発言に見られるように、中国人としてのこの生き方に不満を抱いていた。

ところで、当時（大正）の日本人は、中国のことをどう思っていたらう。1916年1月号の『中央公論』の公論「大正五年を迎ふ」において、新しい一年の内外情勢を予測する際に中国について次のように述べている。

殊に平和克復後の極東の形勢如何、支那帝政の前途果して無事なるべき、再び四百餘州を擧げて動亂の巷と化すべき恐なきか、誰か新年劈頭に立ち此種の問題の念頭に浮ぶを禁するを得んや⁶

先に述べたように、1916年に袁世凱が帝政をとって自ら皇帝になろうとし、これに反対して第三革命が各地で起きている。中国の急激な変化を見て、隣国の日本が中国の前途に対する予測を引き出すことは極めて困難である。この引用した部分からは日本のある種の不安・憂慮が読み取れる。1916年の袁世凱の死後、その遺産の一つとしておびただしい軍閥が残された。その後、軍閥支配者の間の抗争時代は国民革命軍の北伐によって、1927年に終わりを迎える。

1921年、軍閥支配者の抗争の最中に、芥川はこの不安定で激しく変化している中国を旅している。しかし、見学中悠々と観光地の池へ小便をしていた一人の中国人を見、当時の中国情勢と対照的なこの中国人の行為について次の感想を述べている。

少なくともこの男の態度や顔には、さうとしか思はれない長閑さがあった。曇天にそば立つた支那

風の亭と、病的な緑色を擴げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆々たる一條の小便と、—これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大国の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入った。

この風景は、訳者夏丐尊には日常茶飯事のことかもしれないが、外国人の芥川の描写を読むのは、やはり感慨深かったのではないか。この内容は全部翻訳されている。

関口安義によれば、「蕪湖」という章は『支那游記』のハイライトだという。「現代中国、二十一世紀の中国で芥川龍之介を受け入れるか否かは、—にこの章における芥川の中国批判を是とするか否とするかにかかっているのだ」⁷。夏丐尊の翻訳文には、特に芥川の蕪湖の見学と「現代の支那」についての批評が取り入れられている。ここで、芥川の「現代の支那」についての批評を取り上げよう。

その夜唐家花園のバルコンに、西村と籐椅子を並べてみた時、私は莫迦莫迦しい程熱心に現代の支那の悪口を云った。現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、藝術、悉墮落してゐるではないか？殊に藝術となつた日には、嘉慶道光の間以来、一つでも自慢になる作品があるか？しかも國民は老若を問はず、太平樂ばかり唱へてゐる。成程若い國民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の聲と雖も、全國民の胸に響くべき、大いなる情熱のないのは事實である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この國民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリストか、浅薄なる支那趣味の愉悅者であらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌悪に堪へない筈である。

この批評は当時の中国のすべての墮落に対するものであると同時に、引用の後半部に見られるように、この厳しい現実に対する太平樂を唱えている中国の老若男女や、自分たちと深い結びつきをもつ文明のあるこの老大国への幻滅を、彼の怒りのよりどころとして選んでいる。この感情の由来は、新聞に報道された政治的事件によるものではなく、芥川の中国での実体験によるものである。彼は中国の國民に問いを投げかけている。この国の状況を見て本当に何も思っていないのか。夏丐尊は中国の有識者の一人として、芥川の「他山の石」を借り、國民の心に叩き込もうとしている。

上記のような芥川の当時の中国での実体験と感想を夏丐尊が訳出したことには、中国の現状を厳しく認識している有識者が、列強と軍閥支配者のもとで激動する社会状況、国家の危機を意識しながら、共感できる芥川の中国観を選択し、國民の反省と覚醒を求めた過程が表れている。今関天彭の詩「修言竟是人家國，我亦書生好感時」は、芥川にとっても夏丐尊にとっても当時の中国の現状を感慨している心境を最も表すものだったのではなからうか。

3. 他者からのまなざし—芥川が訪問した章炳麟氏・鄭孝胥氏・辜鴻銘先生

芥川は章炳麟氏・鄭孝胥氏・辜鴻銘先生の三人を訪問し、几帳面な観察を『支那遊記』に残している。夏丏尊はその内容をほとんど全て翻訳している。この部分では、芥川の記述を分析したうえで、訳者夏丏尊の翻訳にかけた思いを推察していく。

先に述べてように、章炳麟氏の書齋、鄭孝胥氏の邸宅、辜鴻銘先生の庁堂や彼等の容貌・ふるまいについての芥川の記述には、ほかの日本人作家か旅行家書いているかのような、「他者」の視点が感じられる。

瓦を張った、敷物もない、ストーブもない章氏の書齋、そしてその書齋の壁に引っ付いている大きな鱧の剥製など、芥川やこの遊記を手にするような人々の住む世界とは明らかに異なる世界が記述されている。また、鄭氏に対する記述（「坊間に傳ふる所によれば、鄭孝胥氏は悠々と清貧に處してゐるさうである。（中略）私もかう云ふ清貧ならば、何時身を處しても差支へない」）では、芥川が鄭氏あるいは中国式の「清貧」といかに異なる感覚や価値感を持っているのが描かれている。これらの内容に見られるように、芥川の記述では、「自分」と章氏、鄭氏また辜先生との「差異」が意識され強調されているのが特徴である。

ところが、芥川はこの三人と共通の関心もある。政治である。誰でも当時の中国へ行ってみると、「必一月とある内には、妙に政治を論じたい氣がして来る。あれは現代の支那の空氣が、二十年來の政治問題を孕んでゐるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帶をめぐる間、容易にこの熱がさめなかつた。さうして誰も頼まないのに、藝術なぞよりは数段下等な政治の事ばかり考へてゐた」。

当時の章炳麟は隠居しており、学問に没頭しているが、やはり政治問題を常に念頭に置いていたようだ。芥川の記述によれば、「氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社會の問題だつた」。政治・革命は、まだ章炳麟が自分の使命として位置付けていると言えるであろう。また、彼の政治についての予測は独特である。章氏は、当時の中国の政治や藝術などをほとんど否定している。しかし、国の泥沼の状況からの脱出、「赤化」に期待していない。その根拠は中庸を愛する国民性である。当時の中国の問題を解決するために、「時務を知った後に、計畫を定める一時に循つて、宜しきを制すとは、結局この意味に外ならない。…」と章炳麟は言う。

1921年の「時務」と言えば、「支那の赤化不可能である」ことかもしれない。中国共産黨の結成はまだ知識人・学生にしか届いていない。しかし、カラハン宣言すなわち帝政ロシアの在華既得権の一切の放棄によって、ソ連への期待が膨らみつつあった。一方、日本・西欧列強への失望と疑惑が増大していた。民衆が徐々に強く意識しつつあるナショナリズムは、それ以降共産主義に重なっていった。竹内実の言葉を引用すれば「今日の人間の外見に対する驚きは、昨日の人間の内的萌芽に無感覺であつた告白がともなわなければならない」⁸。しかし、中国革命の展開と結果をみれば、章炳麟の「時務を知る」論はなかなかの真理を含んでいる。第二次世界大戦の前夜には、のちに革命を行うことになる中国農民にもまだそれだけの準備が出来ていなかった。社会問題の重大さと社会運動の弱さの間

の対照は著しかった。しかし、農民問題が解決されなければ、いつか大動乱が来るであろう。侵略・戦争・困窮の状況における中国の農民大衆は共産主義の指導に盲従する力とはならなかった。中国農民はすべての国民を代表するのではないが、きわめて苦しい生活状況を脱出するために、自ら革命の道を選んだ。「時務を知る」共産主義者と農民とが結束して革命の計画を立て、国民党官僚の腐敗と社会問題を根本的に解決できない「時」を迎えると、旧政権が一気に倒され、新中国の成立となった。結果論で言ってみれば、中国革命の勝利は、章炳麟の「時務を知る」論の正しさを証明しているといえる。

鄭孝胥氏も政治に絶望している。英雄あるいは奇跡の出現を待っている。また、辜鴻銘先生に対する芥川の記述では、「先生、又僕の為に段を論じ、呉を論じ、併せて又トルストイを論ず」と書かれている。「段」は段祺瑞、「呉」は呉佩孚をさしている。芥川のこの記述には、彼が辜鴻銘先生に政治の質問をしたことがうかがえる。

芥川の文章には、隠居している章炳麟氏、鄭孝胥氏、「老」ける辜鴻銘先生が、少しでも外の世界の政治的「動き」を積極的に観察しようとする様子が書かれている。ジャーナリストとしての視点からみれば、それはまさに鋭い社会問題意識を体現するものであったといえるだろう。

実際、訪問された方の三人は政治を除き、それぞれ学問・実業などの分野で成功を収めている。それなのになぜ、政治に対してまだ熱があるのだろうか。それはむしろ、当時の中国の状況によることだと思われる。その一方、当時の日本人が彼らをどうみているのか、中国人には興味深いことだったに違いない。

夏丐尊も、恐らく外国人としての芥川が当時の中国の人物をどのように理解し、取り入れ、さらに評しているのかに興味を抱いたのであろう。またこれらの記述によって、当時の中国問題を考える手がかりを提供してくれればという思いもあったであろう。夏丐尊はこれらの理由から、芥川と三人との会見について詳細に翻訳したのだと推察できる。

4. 中国の現実から歴史の「できごと」に辿って

ほかに芥川が岳飛の墓と蘇州を見学したときの二つの連想を見てみよう。そこには彼の独特な見解が示されている。

一つは、芥川が岳飛の墓を見学するとき、秦檜、張俊等の鉄像を見て思い起したことである。夏丐尊はそれを全部翻訳している。以下は、原文における芥川の連想の内容である。

古來悪人多しと雖も、秦檜程憎まれたものは滅多にない。上海あたりの往來では確か字では油炸塊るか云ふ、棒のやうな油揚を賣つてゐる。あれも宗方小太郎氏の説によると、秦檜の油揚と云つたつもりだから、油炸檜と云ふのが本名ださうである。一體民衆と云ふものは、單純なものしか理解しない。支那でも關羽とか岳飛とか、衆望を集めてゐる英雄は、皆單純な人間である。或は單純な人間でないにしても、單純化され易い人間である。この特色を具へてゐない限り、如何に不世出の英雄でも、容易に大向うには持て囃されない。たとへば井伊直弼の銅像が立つには、死後何十年かを要したが、

乃木大将が神様になるには、殆一週間も要さなかつたやうなものである。それだけに又敵になると、かう云ふ英雄の敵は憎まれ易い。秦檜は如何なる悪因縁か、見事にこの貧乏鬮を引いた。その結果は御覧の通り、中華民國の十年にさへも、散散な取扱ひを受けてゐる。私もこの新年の「改造」に、「將軍」と云ふ小説を書いた。しかし日本に生れた有難さには、油揚の憂目にも遭はなければ、勿論小便もひっかけられない。唯一部分伏せ字になつた上、二度ばかり雑誌の編輯者が、當局に小言を云はれただけである。

岳飛の墓は、遠来の芥川に不潔なイメージを与えるだけのようである。しかし、この引用箇所描かれている内容を見れば、芥川はやはり数百年後の民国十年になつても秦檜が依然として、散々な扱いを受けているのに驚いている。秦檜がこの扱いを受けている理由は、芥川によれば、英雄の敵であることである。また、中国と日本の英雄を挙げ、国を問わず民衆は単純なものしか理解しないものであつて、衆望を集めている英雄は、皆単純な人間であるか、たとえそうでないにしても、単純化されやすい人間である、と芥川は彼自身の理解に基づく民衆の英雄観を示している。

夏丐尊は、芥川の秦檜の扱われ方に対する驚きと、芥川が理解している民衆の英雄観が納得できたからこそ、この内容を全部訳しているのであろう。ところが、芥川の原文と翻訳を対照してみると、夏丐尊の翻訳では、嚴曉蒼という人が語つた秦檜の輪廻のエピソードを省略している。特に注意すべきなのは、その最後に芥川が取り上げている嚴曉蒼の話である。「まあ、かう云ふ調子なのです。秦檜の罪は憎むべしとは云へ、氣の毒なものではありませんか？」芥川は、嚴が決して嘘をつくような人ではないと思つている。秦檜の功と罪はここで検討する余地がないが、先に述べた芥川の驚きを合わせて考えると、やはりこの最後の嚴の話における秦檜の歴史的な見方を通じて、芥川は自らの主張や意図をも示しているのではないかと思われる。

夏丐尊がこの部分を省略している理由を考えてみよう。従来、秦檜は恣に和議を唱え、妄りに忠良を屠戮した「千古の罪人」として見られている。秦檜にも歴史上知られていない一面があつたとしても、中国が列強からの屈辱を受けている当時の社会状況においては、国民からの同情を得るはずもない。このような背景を、夏丐尊がこの部分を省略している理由として見なしてもいいのではないか。

もう一つは、蘇州を見学している途中、両刀の男と槍を携えた男との試合を見て、芥川が「水滸伝」についての連想を展開している箇所である。以下は、芥川の原文を取り上げよう。

水滸傳らしい一と云つただけでは、十分に意味が通じないかも知れない。一體水滸傳と云ふ小説は、日本にも馬琴の八犬傳を始め、水滸水滸傳とか本朝水滸傳とか、いろいろ類作が現れてゐる。が、水滸傳らしい心もちは、そのいづれにも寫されてゐない。ちや「水滸傳らしい」とは何かと云へば、或支那思想の閃きである。天罡地煞一百八人の豪傑は、馬琴などの考へてみたやうに、忠臣義士の一團ぢやない。寧數の上から云へば、無頼漢の結社である。しかし彼等を糾合した力は、悪を愛する心ぢ

やない。確武松の言葉だつたと思ふが、豪傑の士の愛するものは、放火殺人だと云ふのがある。が、これは厳密に云へば、放火殺人を愛すべくんば、豪傑たるべしと云ふのである。いや、もう一層丁寧に云へば、既に豪傑の士たる以上、區區たる放火殺人の如きは、問題にならぬと云ふのである。つまり彼等の間には、善悪を脚下に蹂躪すべき、豪傑の意識が流れてゐる。模範的軍人たる林冲も、専門的博徒たる白勝も、この心を持つてゐる限り、正に兄弟だつたと云ふても好い。この心一云はば一種の超道徳思想は、獨り彼等の心ばかりぢやない。古往今來支那人の胸には、少なくとも日本人に比べると、遙かに深い根を張つた、等閑に出来ない心である。天下は一人の天下にあらずと云ふが、さう云ふ事を云ふ連中は、唯昏君一人の天下にあらずと云ふのに過ぎない。實は皆肚の中では、昏君一人の天下の代りに彼等即ち豪傑一人の天下にしようと思ふのである。もう一つその證據を挙げれば、英雄頭を回頭すると、神仙の間にはいつてしまふ。もし嘘だと思ふ人は、試みにニイチエを開いて見るが好い。毒藥を用ゐるツアラトストラは、即ちシイザア・ボルヂアである。水滸傳は武松が虎を殺したり、李逵が鉞を振廻したり、燕青が相撲をとつたりするから、萬人に愛讀されるんぢやない。あの中に磅礴した、圖太い豪傑の心もちが、直に讀む者を酔はしめるのである。

この引用箇所書かれているのは、「水滸傳」に対する芥川理解である。芥川はまず、日本における水滸傳の類作について、「水滸傳らしい心もちは、そのいづれにも寫されてゐない」と述べ、また「馬琴などの考へてゐたやうに、忠臣義士の一團ぢやない」とその間違いを指摘している。次に、本来水滸傳に秘められている豪傑の意識を述べている。芥川はそれを善悪を脚下に蹂躪する一種の超道徳思想であると解釈している。芥川は民衆が水滸傳を愛讀する理由は、そのなかの豪傑の心もちである、とその最後で指摘している。

男二人の試合を見た芥川は、その実体験から従來の中国思想までも見出しており、実に精細に觀察していることがわかる。1916年、袁世凱の死後、軍閥支配者は中国の各地で、實際の「王」となっており、中華民国は名義上のものにすぎなかった。芥川はその實際の中国の政治状況から、このような水滸傳の豪傑意識を読み取ったのかもしれない。

芥川は実体験と歴史の「できごと」を結び付け、自らの見解を示している。恐らく、夏巧尊は芥川理解に賛成したからこそ、この内容を抄訳して中国の国民に見せてあげようという意図があつたのではないかと思われる。改めて、夏巧尊の人物像を見てみよう。夏巧尊は本名が鑄、字が勉旃、悶庵と号し、別号が巧尊である。⁹彼は浙江省上虞県の出身である。1905年、日本に留学に行き、東京の弘文学院で日本語を学びながら受験勉強をし、翌年東京高等工業学校に入学。官費留学が取れないために、経済上の困難で1907年帰国。その後浙江省第一師範学校などで教鞭をとり、特に国語教育に熱心に取り組んでいた。また1927年に章錫琛とともに開明書店を創立し、1930年に雑誌『中学生』を創刊した。日本文学の翻訳にも力を注ぎ、田山花袋「布団」のほか、芥川龍之介「南京の基督」・『支那游記』・「湖南の扇」などを翻訳している。

夏巧尊は、有識者の一人として当時の中国の状況を痛感し、芥川の「中国批判」に共鳴している。彼が翻訳していた「芥川龍之介氏の中国観」には、原文の省略が少なくないが、芥川の中国観に対する理解が間違っているとは言えない。むしろ、夏巧尊の抄訳は『支那

遊記』における芥川の中国観を上手にまとめている。翻訳されているところについては、原文の意図と主張を正確に理解していると言える。そして、国民の反省を呼び起こす内容は、この翻訳文において十分取り上げられている。

このように、芥川はただ一人の作家として中国を旅するのではなく、大阪毎日新聞社の派遣員として、激動の中国を「見」に行ったことが理解できる。先に分析した内容のほか、中国人の形式主義に対する指摘と、日本人は自分の定規によって振り回されやすいという芥川の見解は、なかなか客観的なものである。まさしく、芥川が『支那遊記』の「自序」で述べているように、「『支那遊記』一卷は畢竟天の僕に恵んだ(或は僕に災ひした)」「Journalist 的才能の産物である」¹⁰。

以上、夏丐尊の翻訳文(テキストとして)を分析対象に、芥川龍之介の中国観の「読み方」についていくつかの可能性を提示した。ここで示したように、芥川の『支那遊記』は単に読み物として面白いだけではなく、同時代の文脈の中で分析することで、その時代を考えるためのいろいろな手がかりを与えてくれる。関連する史料も参照しながら、その内容や見解を多角的に分析することで、遊記は作者と翻訳者を結びつけ、両者を取り囲む当時の社会のあり方や認識を考えるための貴重な材料となりうるのである。

.....

【著者紹介】劉芳 (Liu Fang) 中国大連外国語大学専任講師。専門は翻訳論、日中文化交渉論。最近の論文に「芥川龍之介の『死』と二十世紀中国文学」(『都立人文学報』第493号 2014: 91-108.)、「试论“她”胜“伊”的原因——以翻译的汉字造语与现代汉语口语为视角——」(「她」が「伊」を凌駕した原因について—翻訳の漢字新造語および現代中国語の口語の視点から—)(『知性と創造—日中学者の思考—』第6号 2015: 128-139. 日中人文社会科学学会)、「語り手と『他』と訳された『この男』—物語言説の分析を方法に—」(『翻訳への招待』第14号 2015: 73-84、日本通訳翻訳学会が発行する electronic journal)。連絡先: E-mail: youyouequal@163.com

.....

【注】

- ¹ 竹内実(1980)「大正期における中国像と袁世凱評価」、『袁世凱と近代中国』(ジェローム・チェン著、守川正道訳)岩波書店 340 頁。
- ² 関口安義著 (2007)「『支那遊記』論—新たな評価軸をめぐって」日本文学研究会『文学研究』、2007 年 4 月号。1-26 頁。
- ³ 単援朝の論文「中国における芥川龍之介—同時代の視点から」(崇城大学 研究報告第 26 巻 第 1 号、平成 13 年 3 月)における夏丐尊の「訳者記」を日本語にしたものをここで引用する。
- ⁴ 本稿における芥川龍之介『支那遊記』の原文は、岩波書店に出版されている『芥川龍之介全集』(1977 年)を引用している。
- ⁵ 話者を明記するために、ここで「芥川」と「中国人」を加筆しておく。
- ⁶ 「大正五年を迎ふ」(1916)『中央公論』第卅一年一月号、1 頁。
- ⁷ 注 2 論文 19-20 頁。

- ⁸ 竹内実(1966)『日本人にとっての中国像』春秋社、4-5 頁。
⁹ 中国社会科学院近代史研究所 熊尚厚、嚴如平編集(2002)《民国人物伝 十一卷》中華書局、364-369 頁。
¹⁰ 芥川龍之介(1976)『芥川龍之介全集 第九卷』岩波書店、371 頁。

【参考文献】:

- ジェローム・チェン(守川正道訳)(1980)『袁世凱と近代中国』岩波書店
関口安義 (2007) 「『支那遊記』論—新たな評価軸をめぐって」日本文学研究会『文学研究』4 月号
芥川龍之介 (1978)『芥川龍之介全集』岩波書店
竹内実 (1966)『日本人にとっての中国像』春秋社
加藤周一 (2010)『加藤周一自選集 10 1999-2008』岩波書店
河田悌一 (1987)『中国近代思想と現代—知的状況を考える—(研文選書 35)』研文出版
関口安義・他(編) (2007)『芥川龍之介研究年誌』創刊号 (芥川龍之介研究年誌の会)
関口安義(編) (1994)『芥川龍之介研究資料集成第 6 卷』日本図書センター
橋樑(編) (1925)『月刊 支那研究』第二卷第一号
竹内好 (1993)『日本とアジア』筑摩書房
竹内実 (1992)『日本人にとっての中国像(同時代ライブラリー120)』岩波書店
高橋英夫 (1989)『夢幻系列 漱石・龍之介・百閒』小沢書店
竹林滋・他 (2002)『新英和大辞典』研究社
張蕾 (2007)『芥川龍之介と中国—受容と変容の軌跡』国書刊行会
内藤湖南 (2013)『文春学藝ライブラリー歴 1 支那論』文藝春秋社
橋川文三 (1960)『日本浪漫派批判序説』未来社
福田恆存 (1984)『太宰と芥川(近代作家研究叢書 38)』日本図書センター
丸山真男(著)・杉田敦(編) (2010)『丸山真男セレクション』平凡社
溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史(編) (1993)『アジアから考える[1] 交錯するアジア』東京
大学出版会
劉建輝 (2012)『東アジア叢書 日中二百年支え合う近代』武田ランダムハウスジャパン
ルシアン・ビアンコ(坂野正高訳、坪井善明補訳) (1989)『中国革命の起源:一九一五—一九四九』
東京大学出版会